

「台湾キリスト教における健康の医療人類学的研究－真耶穌教会を事例として」

慶應義塾大学大学院社会学研究科 博士課程 1年

藤野陽平

fujino@2001.jukuin.keio.ac.jp

はじめに

健康⁽¹⁾：デカルト的心身二元論に基礎を置く生物医学に由来するので、「病いのない状態」
：身体に異常がない状態⁽²⁾

⇔「患者をものとししか見ない、患者の病いを個性を持った人格との関係でみない⁽³⁾」
近代化の中でそれ以外の医療活動・医療知識を「野蛮」・「未開」なものと排除した⁽⁴⁾。

→1946年にWHOの世界保健憲章

：健康＝「肉体的・精神的・社会的に良好な状態をいい、ただ単に病気や虚弱がないということではない」

⇔健康の概念が拡大しただけでむしろそのようなユートピア的な健康を追い求める事で皮肉にも健康が手に入らないものになってしまう⁽⁵⁾。

→人類学者らは健康を「病いが無いもの」ととらえることが多い。

⇔ローカルな健康の意味を探る必要性があるのではないかと？そこで、本研究では民俗知として健康を捉え、単に「病いが無い」という意味とはことなる健康観を提示したい。

方法

医療人類学：「病いは文化・社会によって異なる」ことを明らかに⁽⁶⁾

→同様に健康も文化・社会によって異なるを考えるべき

⇔健康：生物医学が近代化・植民地化の流れとともに世界中に普及したものであるから「病いが無い」という意味⁽⁷⁾。

→健康という概念が流入する以前から存在する健康の類義語に焦点をあてる。具体的には台湾⁽⁸⁾における「平安^{ピンアン}」という語を扱う

臨床リアリティ：「社会的リアリティの健康に関わる側面、とくに病気についての態度や規範、臨床の場面での人間関係、治療活動⁽⁹⁾」

ライフヒストリーの解釈：「慢性の病いをもつ人びとに対する効果的な臨床的ケアにおいて

核心になる作業のひとつは（中略）患者の病いの経験を、（中略）それらのモデルに固有の用語を使用しながら、意にかなった治療的接近を取り決めることである。もうひとつの核心的な臨床的作業は、病いを個人史における主題へと作り変える患者の^{ライフ・ストーリー}人生の物語を共感をこめて解釈することである。⁽¹¹⁾

→臨床リアリティはそこに暮らす人々の信念の中に刻み込まれたものであるなので、研究者の視点ではなく、彼らの視点に立ち、さらに共感をこめながら研究する必要がある。

健康研究の民俗宗教性

「平安」：台湾漢人社会の宗教の核心は現世利益で⁽¹²⁾、その中でも非常に重要な概念⁽¹³⁾。健康、健康を中心としながらもよいことならば全て「平安」、宮家準が考える民俗宗教にもあたる⁽¹⁴⁾

医療と宗教：分かちがたく結びついてはいるが、医療人類学では医療を解き明かすことを目的とし、多くの宗教を扱う研究をしながらも事例として扱ってきた。

⇔日常的世界で両者を明確に区分できるものではなく、このような態度は研究者の側の分析区分を押し付け、人々の臨床リアリティから離れる

→宗教の場での健康を宗教民俗学的な手法を用い民俗知として考え分析する

真耶穌教会と真耶穌教会での平安

台湾のキリスト教：カトリック教会と長老教会、また真耶穌教会が有力。（台湾人の健康という民俗知を扱うために台湾で成長した真耶穌教会を事例とする。）

真耶穌教会⁽¹⁵⁾

1910：上海のペンテコステ派上海使徒信心会にて張伝泉が聖霊を受けた

1926：台湾に伝道を開始、

戦時中：日本の圧力で一時停滞

戦後：布教に成功

1995：教会数 224 箇所、祈祷所 43 箇所、信徒数約 45496 名、伝道者 112 名

※ 戦後大陸内の状況がわからなくなったために、台湾の真耶穌教会は独立し台湾で発展

キリスト教における「平安」：ヘブライ語の「シャローム」、ギリシャ語の「エイレーネー」の訳語であり、日本語の「平和」、英語の peace

真耶穌教会の教義上の「平安」：「一、体の平安（肉体的平安）二、心の平安（心霊的平安）三、将来の平安（将来的平安）」（『福音小冊』九号「認識真神必得平安」）

事例 一語りにみる平安観一

①叔母に瘤ができました。その村で叔母は真耶穌教会の噂を聞きつけ通い出しました。実際に通い出すとその瘤は完治しました。そこで、一家全員が洗礼を受けて今も全員が信者となっています。(台北市 女性)

②流産をしてから六年間後遺症に悩まされました。重いものは持てず、気分も悪く、歩くのもままならないので、外出は必ず車で行わなくてはなりませんでした。その間はZ教会に行っていたのですがよくなりません。そのような時に友人から「真耶穌教会には本物の神がいる」と教えられ、一回だけ行ってみることにしました。しかし、その祈りの方法が気持悪く、一回でやめてしまいました。しかし、四ヶ月後、もう一度行って「もし本当にここに神様がいるのならば平安を与えてください」と祈りました。それ以来、心が安らかになり、教会に通っているうちに不思議と病気も治ってしまったのです。(台南市 女性)

③真耶穌教会で肝臓の病が治りました。一〇人中九人が亡くなる大変難しい病気で、薬も治療法も無く手が出せない状態でした。しかし、祈ることによって私は治りました。祈ることは病院に行くよりも良いことです。真耶穌教会に通う前は代々仏教の寺院に通っていました。しかし、仏教ではどんなに拝拝しても効果はありませんでした。仏教は線香やお供え物をしないとイケませんが、キリスト教はただ祈るだけでいいのです。非常に不思議です。病が癒されてから妻と一緒に入信しました。もう、拝拝はしません。祖先崇拝のものはすべて捨てました。苦しいときには祈るべきです。(台南市 男性)

④息子が一歳から白血病でした。医者にはすぐに見離されました。子どもが六歳のときに妻の姉の紹介で妻が教会に通い出しました。当初、私は教会に通うことに反対しました。当時、彼は夏でもコートを着なくてはならず、また、解熱剤を飲ませてはならないなどの条件があったので、そのことが解っているかかりつけの医者にはしか通えませんでした。

ある日、家を出ようとしたときに息子が風邪を引いていたので、妻に「いつもの医者に連れて行くように」と言っておいたが、医者に行かず、教会に行っていました。教会に行っていたので遅く帰ってきた妻に「こんなに遅くなってどうした。」と尋ねたところ、妻は「教会に行っていた」と言いました。その時からちょうど子どもの熱は下がり出しました。それ以来彼は健康に暮らしています。今は四二歳でB県に住んでいます。

これは六月のことでした。その後の一〇月の霊恩大会で私以外の妻子家族全員が洗礼を受けました。自分は長男でまだ母が生きており、葬式の拝拝をしなくてはいけないので洗礼を受けられませんでした。妻にも子どもだけ洗礼を受けさせるように言っておいたのです。しかし、教会の会議で子どもだけでは洗礼を受けさせられないということになり、妻は私に内緒でこっそり洗礼を受けたのです。川で洗礼をしているときに私は子どもだけが洗礼を受けるのかと思っていたら、妻も受けていたのでびっくりしました。

しかし、それ以来私も教会に行って集会に参加するようになりました。そして、こう思ったのです。「神は公平な神」ならば、私にもこのような大切な真理を授けてくれると。そして、毎日その真理を授けられるように祈ったのです。

一九六八年二月二日の集会のときに聖霊を受けました。それ以来遺産を貰わなくても構わないと思って、弟に拝拝を任せて、五月五日に洗礼を受けました。それまでは廟の規定通りに生きてきました、線香、金紙、祭り、、今は一切やっていません。この教会の神は本当の神。拝拝の神は人が作った神です。(台南市 男性)

⑤二〇〇一年五月五日土曜日午後七時半頃、私は自転車に乗って教会の詩班に参加しようとしていました。しかし、家から二〇〇メートル程の十字路でオートバイに腰を轢かれてしまいました。その結果、私とその相手の方は田んぼに落ちてしまいました。そのときに強烈に轢かれてしまったので、私は昏迷に陥ってしまいました。神に感謝します。その相手の方の怪我は大したことはなく、すぐに助けられました。しかし、私の状況は相当危険で、両親が事情を知って急いで病院に駆けつけたとき、私の初歩検査の結果を見て、医者は樂觀できず、再検査の結果をみる必要があるといいました。

私の両親はすぐに教会の兄弟姉妹に代祷をお願いしました。観察期が過ぎて、医者は手術をしてもいいかと両親に尋ねました。両親は難しい手術かと質問しました。医者が言うには「手術をしても良くなるとは限らないが、手術をしないと良くなる事はない。」と言うことでした。そのような状況で、私の両親は手術をしないで心をこめて神に頼ると決心しました。それから、七日間入院して、私は医者に出院希望を出しました。しかし、私には激しい脳振動から耳が損傷していたので、必ず入院して検査を受けなくてはなりません。しかし、私は病院ではよく眠れず、脳振動の関係で情緒も不安定で、身体は相当虚弱していました。そこで私は家に帰れるように強い希望を出したのです。

このような時、教会の兄弟姉妹は私のために断食をして祈ってくれました。私のために涙を流して祈ってくださったのです。また、多くの先輩や私を愛してくださっている方々がお見舞いに来てくださいました。主イエスの愛によって快方に向かい、教会の兄弟姉妹の代祷のおかげでどんどん元気になり、多くの人の助けによって健康を取り戻しました。

事故現場に戻ってみて、初めて当時の危険を実感しました。あともう少しでセメントの水溝にぶつかっていたのです。こんなに幸運な事はなかったかもしれません。病院に送られている途中で、神の守りによって、教会の兄弟姉妹の祈りによって、私は生きている事ができました。医者でさえも奇妙であると言っています。これは神の奇跡です。病院に着いた当初はほとんど死にかけの人間であって、このように虚弱で、生存確率はほとんどゼロでした。しかし、神のおかげで、愛のおかげで、多くの方々の愛のおかげで、私は生かされました。全てを神に感謝します。神は人類生命の主宰で、もし神のおかげでなければ、私は今のように健康に暮らしてはいなかったでしょう。(台南市 女性)

⑥一九二六年三月二日に大陸から真耶穌教会が伝わり、四月一二日まで台湾で伝道しましたが、そのときにN教会にて祖父を中心に一家で洗礼を受けました。祖父はZ教会の長老でしたが、真耶穌教会には聖書の真理があったので、家族全員を連れて会員になりました。商売を行っていた人で、真耶穌教会に入ってから位牌は燃やしました。祖母はZ教会系のZ中学を卒業したひとで、やはりZ教会の信者でした。祖父より下の代は一家全員真耶穌教会の会員で父・兄は長老、弟は執事をしています。また、長女の夫は神学院の委員長で、三男の嫁の姉は東京教会で執事をやっています。

父の代にNからMに家族七、八人で移住しました。そのころ父が中心となって宣教し、M教会を設立しました（一九五六年）。当初は父の経営していた電気店の二階で家庭集会を行っておりました。現在M教会には二〇〇人程度の信者がいます。また、多くの親戚が通っている教会です。

子供は男四人女三人で、孫も一人います。全員真耶穌教会の信者です。今の妻は後妻ですが、前妻も後妻も真耶穌教会で出会いました。同じで結婚した方が良いと思います。

平安とは元気、健康のことです。「願您平安」というのは「皆さん元気で」の意味です。さようならの意味で教会の人と別れるときに「平安」というのは「どうぞお元気で」の意味です。つまり、教会に通うということは平安のためともいうことができると思います。

（筆者の問—以下括弧内は同様—教会には助祷カードがありますが、あれは他の人に自分の平安を祈って貰いたいときに記入するのですか。）

はい。病気を治す事は平安になるという事で、逆に病気のは不平安です。つまり、助祷カードによって平安を祝し、不平安を平安にするのです。

（助祷カードは病気や怪我のときにだけ使うのですか。）

そうではなくて、他には兵隊に行くときや、仕事がいまいけないときなどにも利用します。ただし、一番多いのは病気の事です。

（では兵隊や仕事がいまいけないということも不平安ですか。）

兵隊に行くことは別に不平安ではないが、兵隊に行って不平安にならないように祈るのです。また、仕事がいまいけないということも不平安です。

（ご自身の経験で不平安から平安になったというような奇跡がございますでしょうか。）

私には特にありません。生まれてからいままで、特に大きな病気や怪我をしたことはありません。これは私の父が教会の仕事をよくしたからであると思います。父は四〇歳ぐらいになった頃には仕事は子供に任せて、自分は教会の仕事を熱心に行いました。子供達も父の手伝いをしてよく働きました。ですから、私は教会に通っているの、生まれてからいままで平安が保たれているのだと思います。

（説教の中で「真平安」という言葉がありましたが、普通の平安とは異なりますか。）

やはり、平安とは無事や健康の意味ですが、世界中のどこに真の平安がありますか。無

事に暮らしていても数分で命を失うことが有ります。しかし、イエス様と共にいる人生を過ごすならば、本当の意味での平安が得られるということだと思います。(台南市 男性)

⑦(説教の中で出てきた「真平安」と言う言葉に関してお尋ねします。「真」の平安というものがあるのならば、「一般」の平安もあるのかと思いますが、両者の違いは何ですか。)

一般の平安とはこの世のものです。例えばお金持ちと結婚し、金持もうけ、健康、順調などです。しかし、真の平安とは主とある人生、永遠の命、主イエスと天国にいることです。この世のものは過ぎ去ります。ただ神だけが不変です。健康は永遠のものではなく最終的には死を向かえます。「そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっているように、(ヘブル人への手紙 九章 二七節)」⁽¹⁷⁾この世の平安には意味がありません。近い未来誰もが死ぬのです。真の平安とは死後のことに気を払い、審判の日に勝利し、神に受け入れられること。神が備えてくれているものを受け取る事です。

我々クリスチャンは一般の平安ではなく、真の平安に気を使います。「また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。

(ヨハネの黙示録 二一章 三―四節)」この世に住んでいて、一般の平安を手に入れても死、悲、哀、泣、痛(これらは不幸)から離れる事はできません。もし不幸であっても、真平安であることは可能です。この世の不幸をこえて真平安(永遠の命)を手に入れることはできるのです。つまり真耶穌教会に通う事で、人間は真平安を得ることができます。

人間にもし罪がないならば、エデンという天国にすむことができます。この生活が真平安です。最初の人間であるアダムとエバは天国にいたので真平安でした。彼らを不平安にさせたのは罪です。だから罪が我々を天国や神から離れさせているのです。

神は我々を愛しているので、神に至る唯一の道であるイエスの十字架を示し、与えてくれました。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネによる福音書一四章六節)」真平安とは結論的にはイエスによって救われるという事だと思います。

(『福音小冊』には平安を身体平安、心霊(精神の)平安、将来平安の三つをあげていますが、今おっしゃった真平安とは違うもののように感じるのですが、どうですか。)

救われていれば、真平安に気がいき健康など一般の平安は気にならないはずですが。体はこの世にあっても真平安ならば心は天国にあるはずなので、たとえ健康を害していようともイエスに頼るはずです。しかし、真平安には身体が平安になる、心が平安になる、将来が平安になるということも含んでいると考える事もできるかもしれません。多くの人々が病の時にイエスを頼り、癒され、真耶穌教会で受洗し、より深い平安を得ているからです。

また、イエスはこの世に於いても良い生き方をしてもらいたいと思っています。「在地如

天」と言いますが、これは真平安であるならば、この世にいるときからイエスと共にいることができるということです。「御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。（マタイによる福音書 六章 一〇節）」しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。（ヘブル人への手紙一章一六節）」こういう話があります。戦前の真耶穌教会の伝道者が日本総督府の迫害に遭いました。逮捕され、拷問を受け、釈放される時に「また伝道をしてここに帰ってくるような事があつたら、命はないと思え」と脅迫もされました。しかし、彼は恐れず伝道を続けました。その結果、東部地区に多くの信者ができたそうです。つまり、彼はこの世にあっても真の平安を得ていたと思います。（台南市 男性）

⑧まだ教会に行く前、小学六年の一四歳の時自宅で聖霊を受けました。父は伝道者でした。次の日に初めて教会に行きました。同時に弟も聖霊を受けました。しかし、弟は伯母のいつけで五銭貰って線香を買いに行きました。最初は聖霊を受けたからと断ったのですが、当時一日一銭のお小遣いだったので、五銭が欲しいために買行ってしまったのです。その時から弟は聖霊を受けなくなりました。その十年後、Hの教会を新しく建てる時に弟は聖霊をもう一度受けました。彼は五銭欲しいがために、偶像の線香を買ってしまったのです。

父が初めて信仰に入ったのは商売が失敗したときでした。知人に誘われ教会で祈りの方法を教わり、私と弟に祈りを教えました。方法は簡単で「^{ヘリルヤ}哈利路亞（ハレルヤ）」「^{ゼンメイジュイエス}賛美主耶穌（主イエスを賛美します）」とくり返すだけでした。徐々に聖霊を受け、体が動き出しました。一週間後程で霊の言葉を語りだしました。これは聖霊が私達の代わりに祈っているのので何と言っているかは解りません。私達が考える祈りは「お金持ちになりたい」のようなものですが、霊の祈りとは異なります。今は家族全員真耶穌教会に通っています。

終戦後の教会は伝道者も少なく、荒れている所が多かった。私は家庭を捨て各地を訪問しました。そのような時私は信者を訪問して何を言っているかわかりませんでした。どう言えば彼らを安心させて、信仰から離れないようにできるか。そのような時神は二〇倍の聖霊をくださった。その時霊が強かったのは私が神様の為に働いていたからです。

その後長男が生まれました。しかし妻に乳が出なかった。だからミルクを買わなくてはいいけません。給料の全てをミルクに使いました。妻の実家から子供を産んでも育てられないと罵倒されました。そこで仕方がなく戦後辞めていた電気屋を再開しました。仕事は忙しく金は儲かったが、霊が一〇分の一に下がってしまった。これは私の大失敗です。

まだ霊が強かった頃、私は悪霊を追い出したことがあります。台南にSと言うものがありました。彼はあるときにタクシーの運転手を引きずり出して強盗をし、時計屋で長時間見るだけで買わない彼に店員が時計を見せる事を拒み怒った彼はウインドウを壊したりしました。彼には悪霊が憑いていたのです。更正させようとする母親を台湾中引きずりまわす。

寒い冬の夜中に水を被る。大きな石をみると投げとばす。そのような彼に私は出会いました。初対面にも関わらず彼は私の名前がわかり、伝道をしていた事を知っていた。悪魔が彼に教えたのです。伝道者である父の言うことも聞かないのに、私の云う事はすぐに聞きました。なぜかと言うとそのとき私は二〇倍の聖霊を受けていたからです。そこで私が家に引き取って、聖書を紙に写させました。しばらくすると動かなくなったので、どうしたと尋ねると、トイレに行きたいと言った。私が許可したら、トイレに行った。眠る時も私の許可がなければ眠らなかった。結局彼は二日後に悪霊から開放されました。私は主イエスの名によって悪霊を追い出したのです。しかし、霊が弱い人が行くと自分が悪霊にやられる事があります。その時の私は霊が強かったのでそういうことができたのです。

また他の悪霊に憑かれている者は、白い着物を着て「私はもう清くなったから、教会に行かなくてよい」といい、伝道者や長老が来ても「私は清いがあの伝道者は清くないから私に会う資格がない」といい、安息日に礼拝に誘っても「もう清いのだから、教会には行かない」とくり返していました。そのような状況だったので私が行っても同じであろうと思いきや躊躇しました。しかし、実際に行ってみると、話をする事が出来ました。彼女は私が来ると跪いて話し出しました。「私が病気に罹ったのは息子に教会で良い嫁を見つけたのに、息子は芝居をする女と逃げてしまった。嫁に申し訳なく、悩んでこのような病気になってしまった。」そこで、私は自分の息子は不良なのに教会の良い娘をあげるなんて、自分の息子を買いかぶりすぎたのだと説教をしました。伝道者や長老が行ってもだめだった人が、私が行った事によって誰にも話していない秘密を打ち明けてくれたのです。

三人目は八年間鬼に憑かれた人の事です。大学を卒業後、ある女のために鬼に憑かれてしまった男です。悪鬼がついていたので、伝道者や長老が祈りに行っても殴りかかってくるような男でした。真耶穌教会は悪鬼を追い出す力があるので彼は通いだしました。そこで私が彼の家に行く事になりました。私が行くと彼はおとなしく「哈利路亞、賛美主耶穌」と祈りだしました。普段は彼の部屋に誰か入ると殴られたのですが、その日は母親も今日はおとなしいと怪訝そうでした。一ヵ月後、彼の家を訪れた時に私は仕事を始めた時で霊が弱くなっていて、私の言う事を聞かなくなっていました。さらに一ヵ月後、私の霊は一〇分の一になっており、今度は彼に殴られてしまいました。この時は失敗でした。

(鬼や悪霊とはどのようなものですか。)

ある女性が鬼に憑かれた。家の人は部屋に閉じ込めて、食事だけ与えていた。嫁は産婆だったので薬を混合していたが、その女性には壁越しにその姿が見えた。彼女は見えなくてもある人がどこに居て、いつ頃、どのような服で、何人でやってくるのかを言い当てた。あるときには「巡査が来たから迎えにでよ」と見えないのに言った。彼女が落としたネックレスを誰かが拾って返さなかった時、彼女の力は噂になっていたもので、彼女が「誰が持っているかわかってる。すぐに返さないとみなにばらすぞ」と脅かしたところ、持っていた人はすぐに返しに来た。彼女の部屋には鍵がかけられていたが、腕をさっと振るだけで

その鍵を内側から開けることができたので、鍵にはあまり意味がなかった。鬼に憑かれてから四〇日後彼女は目が見えなくなった。何故見えなくなったかといえば、イエスが「もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。(マタイによる福音書五:二九)」と言ったように彼女が遊んだり、芝居を見たりすることが無い様にイエスが見えなくしたのです。私が彼女の手を触ると彼女は私だと理解しました。

その他にも父が追い出した鬼の事です、その人は鉄の鎖につながれてもその鎖を引き裂く事が出来たのです。悪魔の力が無ければ強い力で引き裂こうとしても、逆に手が折れてしまうはずです。鎖が壊れると言う事は悪魔の力があつたからなのです。

(悪魔に憑かれるとどうなりますか)

いろんな事を喋る、殴る、聖書に書かれている悪霊の通りでしょう。見通す力、変な力、気がふれる等があると思います。アメリカから伝わった礼拝で聖霊を使う霊言を翻訳する教会がありました。英語の出来ない女性信者で霊を受けると英語で預言をする事が出来た人がいました。ある時その女性は英語で牧師を罵りだした。それまで奇跡として彼女の言葉を通訳していたアメリカ人牧師はそれ以来彼女の預言を無視するようになりました。その人がその後真耶穌教会に来る事がありました。彼女も霊を受けて祈っていたが、隣に座っている人が霊に突き動かされて、その女性を弾き飛ばしてしまったのです。この時私達は彼女の霊は悪霊であると理解しました。つまり、彼女の牧師への罵倒は悪霊の力によるものでした。また弾き飛ばされたのは聖霊が悪霊を近づけないために行ったのです。それでは様々ある鬼の中でどれが本物の霊でしょうか。それは「イエスは神の子である」と証が出来る霊だけが本当の霊です。

(話は変わりますが、平安とはどのような意味でしょうか。)

平安とは「達者」、「元気」のことです。あるいは韓国語で「こんにちは」のことを「アンニョンハシムニカ」と言いますね。このアンニョンは平安と同じです。教会で病気を治すのは医者に見捨てられて藁をも掴むような人を神が呼び寄せるときに行います。その様に病気が治ればイエスが神であるということが解るでしょう。聖書にも書いてあります。死んだ子供をイエスに生き返らせてもらった女性はイエスを強烈に信じたのです。イエスは誰かを呼び寄せる最初の時に奇跡を行うのです。長血の女の例⁽¹⁹⁾を見てください。

(それではあなた自身が何か病気に罹り、神に癒してもらったことはありますか。)

八月七日中風にかかりました。教会の長老が来て「特効薬があるから飲みなさい」と勧めてくれました。しかし、本当に病気を治す薬などないのです。特効薬と言っても効き目はありません。なぜなら私たちの肝臓は五〇〇以上の薬を作ることが出来ますが、世界一の製薬会社でもそれほどのことは出来ないでしょう。まして心臓を癒すような薬なんてありません。中風を治すには脳を開いて血液を取り除くしかないのです。長老は私に医者にかかる事を勧めるが、私は医者には行きません。そういうと長老は「それではまるで信

者は医者になってはいけない。薬屋もいけないと言うようなものではないか」と批判するのです。私はその事と私の信仰はまた別の事であると思います。私には二つ確信している大切な事があるのです。一つはイエスが言うように、イエスの名を認めないなら将来神の前に出たときに私の名前も認めてもらえないということです。もう一つは神を侮ってはいけない、見下してはいけないということです。神は私を癒す者であると聖書に書いてあります。イエスは私を愛しているから、決して良い医者にかかれとか大きな病院に行けとは言いません。私は神様を信仰しています。だからたとえ死んでしまっても、神様を見下したりはしません。もし自分の父親がえらい医者だったら、父親にかからずにその他の医者のところに行くと言う事は父親を侮っている事だと思います。私はそういうことはしません。だから私は死んでも構わないから医者にはかかりません。ただ、実は医者には行っているのです。でもそれは無料だからであって、もらってきた薬は一つも飲んでいないのです。私が病気になるという事は神とともに苦しみをうけているということの証であると思います。神とともに苦しむ人は神とともに喜ぶ事が出来るのです。

こんな事がありました。結婚して二年の夫婦の夫が重い病気になりました。その後妻は他の男と駆け落ちしてしまったのです。五年後夫は回復し、仕事もうまくいって、大きな家を建てました。そのパーティーの時に妻は帰ってきたのです。人々は家も出来て、妻も帰ってきてこんなにめでたい事は無いとお祝いしたのですが、夫は「私の気持ちも考えてください。この女は私が病気の時に他の男と逃げ出して、私は大変に苦労したのです。今度は商売が成功したら帰ってきた。この女は私ではなく、お金の為に帰ってきたのでしょう。彼女はお金を愛していて、私を愛しているのではありません。私を愛しているのならば、私とともに苦しむはずである」と言ったというそうです。ローマ人への手紙八章にはイエスと共に苦しみを受ければ、将来イエスと共に楽しむ事が出来るとあります。人間は苦しみを受けなければ完全になれません。五章にもそう書いてあります。多くの人がこのことが解らない為に、一度信仰をもっても苦しい事があると他の神様を拝みに行ってしまうのでしょうか。では、神とともに苦しむのには何が必要でしょうか。それは神の霊が共にあることです。多くの人が病院で苦しんでいます、その人たちは神の霊とともにいません。だから、彼らはイエスとともに苦しんでいる事とは違うのです。(嘉義市 男性)

解釈

- ・ 医学の治療をせず、神（イエス）に頼る治療
- ：「医者に行かず、教会に行っていた。④」
- ：「私の両親は手術をしないで心をこめて神に頼る⑤」
- ：「身体はこの世にあっても真平安ならば心は天国にあるはずなので、たとえ健康を害していようとイエスに頼る⑦」
- ：「イエスは私を愛しているから、決して良い医者にかかれとか大きな病院に行けとは言わ

ない。(中略)私が病気になると言う事は神とともに苦しみをうけているということの証である。神とともに苦しむ人は神とともに喜ぶ事が出来る。⑧」

＝一般の人々との臨床リアリティの大きな隔たり

クラインマン：「ヘルス・ケア・システムの原動力は社会的に正当化された権威である。その権威の応用を効果的にするのが象徴的リアリティである。そして、社会的リアリティに対して数多くの視点がかんがえられる場合に、そのうちのどれが正当化されるのかを決定するのは、政治的、社会経済的、文化的な権威である。⁽²⁰⁾」

→これらの人々にとって権威のあるものは神(イエス)

池上良正：日本のホーリネス教会の過剰ともいえるほどの「正しさ」へのこだわりはキリスト教信仰以前から彼らの人格の中枢に固く植え付けられており、その規範を維持できない苦しみ「救い」への希求となり、人びとを教会に引き寄せたのではないか⁽²¹⁾。

→生物医学の治療を拒んで神に頼った背景には彼らの強烈なまでの健康への欲求が隠されているのではないだろうか。もしそうではなく健康というものがそれほど重要視されていないならば逆に医学の治療と神に頼るということが両立できるであろう。健康というものが本当に大切なものであると考えられているからこそ、他の何物でもなく神に頼ろうとしたのではないか。

・ 健康の原因

1 「神もしくはイエスの名」

：「主イエスの愛によって快方に向かい⑤」

：「神の守りによって、⑤」

：「神のおかげで、⑤」

：「もし神のおかげでないならば、私は今のように健康に暮らしてはいなかったでしょう。

⑤」

：「私は主イエスの名によって悪霊を追い出したのです⑧」

2 「祈り」

：「もし本当にここに神様がいるのならば平安を与えてください」と祈った。②」

：「祈ることによって私は治りました。③」

：「教会の兄弟姉妹に代祷をお願いしました。⑤」

：「私のために断食をして祈ってくれました。⑤」

：「私のために涙を流して祈ってくださったのです。⑤」

：「教会の兄弟姉妹の代祷のおかげでどんどん元気になり、⑤」

：「教会の兄弟姉妹の祈りによって、私は生きている事ができました⑤」

3 「愛」

：「多くの先輩や私を愛してくださっている方々が⑤」

：「愛のおかげで、多くの方々の愛のおかげで、私は生かされました⑤」

4 「教会に通う事」

：「その村で叔母は真耶穌教会の噂を聞きつけ通い出した。実際に通い出すとその瘤は完治した。①」

：「教会に通っているうちに不思議と病気も治ってしまった②」

：「妻は「教会に行っていた」と言った。その時からちょうど子どもの熱は下がり出した。④」

：「生まれてからいままで、特に大きな病気や怪我をしたことはありません。これは私の父が教会の仕事をよくしたからであると思います。(中略)私は教会に通っているので、生まれてからいままで平安が保たれているのだと思います。⑥」

：「そのような時神は私に二〇倍の聖霊をくださった。その時霊が強かったのは私が神様の為に働いていたからです。⑧」

→真耶穌教会の内部では病因よりも健康の原因の方がよく聞かれる。

渡邊欣雄：台湾の漢人社会の神観念を神、鬼魂、祖先に分け、神は求めに応じてプラスの力を与える存在、鬼魂は祀らないと人間にマイナスの力を加える存在、祖先は祀ればプラスの、祀らなければマイナスの力を与える⁽²²⁾

⇔キリスト教では神の力を強調し、鬼（悪霊）の力を認めないか神の前では無力に等しいと考えるために鬼の力が介在する病いや災害の原因を語ることは少なく、むしろ平安の原因として神の力を語るということができ、真耶穌教会においては平安の原因のほうがより聞くことができると言えよう。つまり、漢人社会の神を一元化してその働きを強化し、鬼をその対極に存在するものとして否定し、祖先祭祀を関心事から排除するという二極構造によって核となるその原因を「平安」に集中させているといえよう。

・ 真平安

：「真の平安とは主と共にある人生、永遠の命、主イエスと天国にいますこと⑦」

「イエス様と共にいる人生を過ごすならば⑥」：神・イエスが共にいる生活を真平安

「神の霊がともにあること⑧」

→一般的な平安よりもよりシャロームに近い意味に解釈しなおしている。しかし、それで

も⑥や⑧のように平安が健康の意味を持つということは否定せず、シャロームの意味の平安と台湾の民俗宗教的な平安の意味を持つハイブリッドな平安観が提示された。おそらく真耶穌教会では「平安」にはキリスト教的な意味の恒久平和や言い尽くすことのない愛の世界、霊言という形で現れる聖霊への信仰というニュアンスが溶け込んでいるのであろう。

おわりに

以上台湾の真耶穌教会に集まる人々の語りを事例として「病いが無い」という意味とは異なる健康観を提示してきた。健康観の形成には、生物医学を強力に推し進める病院や保健衛生の政策を展開する政府の関与もある。その場合には世界保健憲章との「交渉」や読み替えがある。上述のように世界保健憲章は単に病いが無いという状態を健康というのではないとしたのは評価できるが、逆に健康の条件が増えてしまったために健康がユートピア的で実現不可能な物になってしまった。台湾のキリスト教信者、特に真耶穌教会では平安を単に病いが無いという意味の健康を超えて、キリスト教のシャロームの意味を持たせハイブリッドに再解釈していた。ただし注目すべきは静態的にその平安観を受け入れているのではなく、真耶穌教会では拡大した平安観の中で、各自の生い立ちを反映させながら一人一人独特な平安を選択していくということである。具体的には⑥は民俗宗教的な平安に⑦や⑧はシャロームに近く平安を理解している。つまり健康とは決して「病いが無い」という意味でもユートピア的なものでもなく、各人の個人的な体験の中で作り上げているものであると言える。そうすると次にすべき作業はミクロなライフヒストリーに注目する事で、人々が受容あるいは拒否しながらいかに健康を形成しているのかということと、その一人一人が築いた健康観にむけてどのような実践が行われそれがまたその人の健康観にどう影響を及ぼすのかを探る事であろう。こうした動態的な健康観の諸相を明らかにすることによって、現代の台湾社会の在り方を深く理解することができるようになるであろう。

(1) 多少問題はあるが議論が複雑になりすぎるので、本稿では健康を[health]の訳語として扱い、中国語の「健康」^{ジェンカン}と同義であるとしておく。

(2) Harriet Beinfield & Efrem Korngold「中国伝統医学：入門のための概説」『季刊オルタナティブ・メディスン日本版』Vol. 2 No. 3 一九九八年

(3) 山口昌男『病いの宇宙誌』論風社、一九九〇年、三五頁

(4) Roy Porter, *Health For Sale: Quackery in England 1660-1850* (Manchester University Press, 1987) 田中京子訳『健康売ります イギリスのニセ医者のお話 1660-1850』、一九九三年、みすず書房

(5) R. J. Dubos *Mirage of Health: Utopias, Progress and Biological Change*. (Harper, 1959) 田多井吉之介訳『健康という幻想』、紀伊国屋書店、一九八三年

(6) 大貫恵美子『日本人の病気観』岩波書店、一九八五年、三〇八頁、佐藤純一

「[Illness/Disease] 再考」『からだの科学』142, 一九八八年、波平恵美子『医療人類学入門』朝日選書、一九九四年、二九頁等。

-
- (7) 池田光穂『実践の医療人類学 - 中央アメリカ・ヘルスケアにおける医療の地政学的展開 - 』世界思想社、二〇〇一年、二五四―二七八頁
- (8) 台湾には原住民もいるが本研究の母集団は漢民族であるので、本稿では台湾人は台湾に暮らす漢民族を指すこととする。また、ルビは国語^{グオユイ}と呼ばれる北京語に基づいて標記した。
- (9) Arthur Kleinman *Patients and Healers in the Context of Culture: An Exploration of the Borderland between Anthropology, Medicine, and Psychiatry* (University of California Press, 1980), 大橋英寿、遠山宜哉、作道信介、川村邦光訳『臨床人類学』弘文堂、一九九二年、四一頁
- (10) Arthur Kleinman *THE ILLNESS NARRATIVES: Suffering, Healing and the Human Condition* (Basic Books, Inc, 1988) 江口重幸 五木田紳 上野豪志訳『病の語り―慢性の病いをめぐる臨床人類学』、誠信書房、一九九六年、六〇―六一頁
- (11) 渡邊欣雄『漢民族の宗教』第一書房、一九九一年
- (12) 渡邊欣雄 前掲書二八頁
- (13) 宮家準『宗教民俗学への招待』丸善ライブラリー、一九九二年、一〇一―一二七頁
- (14) 以下の歴史に関する記述は『真耶穌教会 台湾伝教七十周年記念刊』をもとにしている。
- (15) 本稿で引用した聖書は日本の真イエス教会が利用している『聖書（口語訳）』を利用した。
- (16) マタイによる福音書九章二〇―二二節、マルコによる福音書五章二五―三四節、ルカによる福音書八章四二―四八節
- (17) Arthur Kleinman 前掲書 一九八〇年、四七頁
- (18) 池上良正「大正期のキリスト教聖霊派に見る信徒たちの「救い」 ―ホーリーネス教会の「あかし」分析を通して―」（『駒澤大学文学部研究紀要』第五九号、二〇〇一年）二二八―二三四頁
- (19) 渡邊欣雄、前掲書、二六一―三一頁